

三輪遺跡(2)

——本郷住宅地地点——

1987・3

長野市教育委員会
長野市遺跡調査会

序

社会生活の変革とともに「物の豊かさ」から「心の豊かさ」が求められる今日、文化財は現代人の心の糧として欠くことのできない文化的要求と考えます。

昭和25年に、文化財保護法が制定されて以来35年有余の歳月を経過しましたが、特に埋蔵文化財に対する保護措置が、開発事業と相まって高まりつつありますことは、誠に喜ばしいことであります。

申し上げるまでもなく、埋蔵文化財は遠い過去に先人が残してくれた基本的な文化遺産であります。往時の人々の生活状況・社会構造あるいは文化的内容を知るうえで貴重な基礎的資料となり、新しいこの時代に消滅させることのないよう保存・保護に的確な措置を講じ後世に伝承させていくことが、現代社会に課せられた重要な使命であります。

このたび、長野電鉄株式会社が、三輪地籍内で宅地造成事業を実施するにあたり、市教育委員会に発掘調査の申出があり、協議の結果長野市遺跡調査会が担当しこれにあたることになりました。現地は、長野電鉄桐原駅～本郷駅間の中間点で、線路北側と北国街道に挟まれた一角に位置し、今は静かな住宅地として行んでおります。このあたり一帯は浅川扇状地遺跡群に包括され、既に三輪小学校校舎改築時にも発掘調査を行ない、弥生時代以降の集落遺跡が確認されているところであります。

発掘調査の結果につきましては、以下調査報告書を熟読願ひ広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する歴史・文化等の正しいご理解をいただければ大変幸に存じます。

終わりに、本遺跡の調査から整理・報告書作成に至るまで、多くの方々からご指導ご協力を賜りましたことに対し、心から感謝を申し上げる次第であります。

昭和62年 3月31日

長野市教育委員会教育長

長野市遺跡調査会会長 奥村 秀雄

例 言

- 1 本書は、長野電鉄株式会社「本郷住宅地造成事業」に伴う緊急発掘調査報告書である。
遺跡名は、周知される「三輪遺跡」内の「本郷住宅地地点」とする。
- 2 調査は、長野電鉄株式会社と長野市教育委員会との契約に基づき、長野市遺跡調査会が担当した。
- 3 本書作成における、分担は下記の通りである。

遺構図整理・浄書	奈須野・千野・青木
遺物整理・実測	田中・中殿・横山・青木
遺物図浄書	中殿・青木
写真	山口
- 4 本書の編集・執筆は、矢口の指導に基づき、中殿と青木が共同で行った。
なお、第11章「遺跡周辺の環境」については、長野市立博物館 和田博氏に玉稿を賜った。
記して感謝申し上げたい。
- 5 調査の諸記録及び遺物は、長野市立博物館において保管されている。
- 6 本書挿図における遺物番号は、通し番号とし、写真図版と合致している。また、遺構図中のドットに伴う数字は、遺物番号を示し、スクリーン部分はカマドを表わしている。

目次

序

例言

I	調査に至る経過	
1	本郷住宅地造成事業	1
2	調査会及び調査団	2
II	遺跡周辺の環境	
1	地理的環境	3
2	歴史的環境	5
III	調査内容	
1	調査経過と調査の概要	8
2	I期の遺構と遺物	10
	4号住	
3	II期の遺構と遺物	13
	5号住 4号溝	
4	III期の遺構と遺物	18
	1号住 2号住 3号住 土壌	
5	その他の遺構と遺物	37
	1～3号溝 検出面	
IV	調査のまとめ	42

挿図目次

図1	遺跡周辺の環境	4
図2	調査対象地	6
図3	本郷住宅地造成事業計画と発掘調査範囲	9
図4	4号住居址	10
図5	4号住居址出土土器(1)	11
図6	4号住居址出土土器(2)	12
図7	5号住居址	13
図8	5号住居址出土土器(1)	14
図9	5号住居址出土土器(2)	15
図10	4号溝址と出土土器	17
図11	1号住居址	19

図12	1号住居址出土土器(1).....	20
図13	1号住居址出土土器(2).....	21
図14	1号住居址出土土器(3).....	22
図15	2号住居址.....	24
図16	2号住居址出土土器(1).....	25
図17	2号住居址出土土器(2).....	26
図18	2号住居址出土土器(3).....	27
図19	3号住居址.....	30
図20	3号住居址出土土器(1).....	31
図21	3号住居址出土土器(2).....	32
図22	3号住居址出土土器(3).....	33
図23	3号住居址出土土器(4).....	34
図24	3号住居址出土土器(5).....	35
図25	土壌と出土土器.....	35
図26	1・2・3号溝址.....	37
図27	1・2号溝址出土土器.....	39
図28	検出面出土土器(1).....	40
図29	検出面出土土器(2).....	41
図30	第1段階の土器.....	44
図31	第2段階の土器.....	45
図32	第3段階の土器.....	46

図 版目次

図1	調査地全景・1号住居址	図版8	4・5号住居址出土遺物
図2	1号住居址	図版9	4・1号住居址出土遺物
図3	2号住居址	図版10	1・2号住居址出土遺物
図4	2・3・4号住居址	図版11	2・3号住居址出土遺物
図5	5号住居址	図版12	3・住居址出土遺物
図6	土壌・溝址	図版13	3号住居址出土遺物、灰釉陶器
図7	調査風景		

I 調査に至る経過

1 本郷住宅地造成事業

長野市東北部の浅川扇状地には、数多くの遺跡が存在し、通称「浅川扇状地遺跡群」と名付けられている。この浅川扇状地の西側末端の三輪地籍にも、埋蔵文化財が濃密に分布しており、開発事業に際しては、その保護に関して注意を要する地域といえる。

昭和60年2月19日付けで、長野電鉄株式会社より、三輪地籍内（三輪9丁目146他）での宅地造成計画（本郷住宅地）協議申出があり、市教育委員会社会教育課では開発地域内での遺物の散布を確認したうえで、埋蔵文化財包蔵状況を把握するための試掘調査の協力を要請した。

試掘調査は、昭和60年3月5日に実施された。開発地域の現状は、東側が日本機材工業株式会社跡地、残り西側は畑地であった。調査の結果、工場跡地に関しては、既に撤去工事により深さ1mにわたり攪乱され、埋蔵文化財の包蔵を認めるには至らなかったが、畑地部分においては、住居址と考えられる遺構の上面を数カ所において確認するに至った。

このため市教委では、事業に先立ち発掘調査による記録保存の必要性を認め、長野電鉄株式会社の協力を得て、調査を着手する運びとなった。調査範囲は、埋蔵文化財の包蔵を認めた畑地部分約1600㎡のうち、施工により現地表下への掘削が及ぶ道路部分450㎡に限定したが、調査範囲内で確認された遺構に関しては、拡張して全形を検出するものとした。その他の地域に関しては、盛り土された上に施工される計画となり、施工に当たっては地下へ影響が及ばぬよう配慮されることとなった。

なお、本遺跡の名称を「三輪遺跡」としたが、その根拠について補足しておきたい。

「三輪遺跡」は、三輪地籍のうち「相ノ木」から「本郷」にかけての広い地域にその範囲が設定されるといわれているが、比較的早い時期に市街化が進んだため、その正確な範囲等は不明といわざるをえない。今回の調査地は、字「相ノ木東」であり、調査地東端を境として「宇木」地籍となる。同じ「相ノ木東」地籍内には、昭和50・51・53年度に調査された三輪小学校が存在し、同遺跡は「三輪遺跡」内での「三輪小学校地点」として報告されている（長野市教委1980「三輪遺跡」）。同地点と本調査地とは約300m隔たりを有するが、集落址としての連続性を考慮し、本調査地もまた「三輪遺跡」に該当するものと判断し、「三輪遺跡・本郷住宅地地点」として報告することとした。

2 調査会及び調査団

長野市遺跡調査会は、市内所在の埋蔵文化財等遺跡発掘調査の調整企画及び、それに基づく発掘調査・分布調査を実施し、その記録作成と発掘された文化財の保存活用について研究することを目的として設立されているもので、長野市教育委員会より委託を受け、各遺跡調査団を編成して調査を実施するものである。

- 調査会 会長 奥村秀雄（長野市教育委員会教育長）
委員 米山一政（長野市文化財保護審議会会長）
桐原 健（長野市文化財保護審議会委員）
清水宮一（長野市教育委員会教育次長）
関川千代丸（長野市教育委員会文化財専門主事）
矢口忠良（長野市立博物館学芸員）
監事 高野 覚（長野市教育委員会総務課長）
事務局長 戸津幸雄（～61・3）
吉見 敏（61・4～）（長野市教育委員会社会教育課長）
局員 吉池弘忠（長野市教育委員会社会教育課主幹）
山崎博三（長野市教育委員会社会教育課主査）
- 調査団 調査団長 矢口忠良（長野市立博物館学芸員）
調査員 山口 明・青木和明・千野 浩・奈須野由美（長野市立博物館学芸員）
中殿章子・横山かよ子・田中寿賀子・矢口栄子（長野市遺跡調査会）
出河裕典・小岩井久仁・土屋 浩・森山嘉亮（信州大学学生）
執筆者 和田 博（長野市立博物館専門主事）
- 作業員 井出つたえ 花岡艶子 川島邦子 伊藤幸子 丸山たまき 熊原馨 松山巧 春原文八
飯島喜知郎 牧野茂 高梨誠司 木賀勇 早津隆雄 染野卯年 藤沢月子 荻原熊夫
平塚五市 関金治 中村秀夫 早津春子 賢田明 宮沢直樹 寺島康文

調査は、長野電鉄株式会社の全面的な御協力をえて実施されたものである。関係各位にたいし、厚く御礼申し上げたい。また、調査成果の整理から報告書作成に至るまで、長野市立博物館諸氏の御助力を頂いている。記して感謝申し上げたい。

II 遺跡周辺の環境

1 地理的環境

標高300～350mの低平な長野盆地（善光寺平）は、千曲川を本流として犀川その他の諸河川を合流し、西南から東北に向けて長軸約40km、横幅の最も広い部分で約10kmに及ぶ紡錘状に展開する。

盆地以東は、上信越国立公園を形成する三国山脈で火成岩を主体とした急峻な山谷を示し、山脚部はリアス式海岸状の出入に富み、おぼれ谷相当部には扇状地や崖錐が発達している。

これに比して盆地以西は、標高700～800mの切崖面を形成する中新世以降の若い堆積層を主としており、地層の走向は盆地主軸に並行する。このため、盆地西側の辺縁部は段丘や断層を伴って比較的単調で、一般的に南部で扇状地が優勢に発達し北上するに従って劣勢となり、逆に千曲川以東に発達した扇状地形を見せる。

このような巨視的地形の中において、飯縄山を水源とする浅川は山間部を浸食流下した後、三登山南麓を限る西条断層とこれに直交する上松断層の接点にあたる浅川東条地籍の通称浅川原口を谷口として盆地に流入し、東南方向を主軸とした平均傾度 α を計測する典型的な扇状地を形成する。扇頂から約2km弱東南流した浅川は以後天井川となり、さらに約1km弱流下した富竹附近で大きく左旋回し、千曲川自然堤防の西側後背湿地帯を東北へ貫流して豊野町に至り、鳥居川と共に千曲川に流入する。

浅川扇状地は、右翼既ち南方部では扇頂から約2km南下した三輪八丁目で城山丘陵を横断した堀切沢が扇状地と城山丘陵との接合部を一部開析しているが、新町一柳町一荒屋を縫合線として湯福・裾花川扇状地に接し、扇端は標高370m等高線沿いに東流する鐘鐺川用水附近で端末状段丘を形成し、さらに延びて360m等高線前後を西南一東北に走る国鉄信越本線を越え、一部沖積地帯を呈しながら平林一東和田一南郷にまで達して沖積地に移行する。

この扇状地の伏流湧水地帯は、古米桐原七景と呼ばれて親しまれていた湧泉にもうかがわれるように、標高390～370m線の間に帯状に分布し、そこに相ノ木・桐原・返目・吉田さらに稲田・徳間の諸集落が発達し、県道長野豊野線（旧北国街道、通称相ノ木通り）をはさんで一連の街村を形成している。

湧水地帯下縁を裾花川から導水した前述の鐘鐺川用水が東流する。用水は点在する溜池と共に、それより低位の広い範囲にわたって条里制遺構を呈する水田地域をうるおしていたが、年を追って水田が姿を消し住宅や事業所が立ち並びつ、ある。

このような浅川扇状地の南方下部地域にある本遺跡の地点は、長野電鉄本郷駅東方約200m余の線路傍北側に所在する。本遺跡でも同様であったが本郷駅西方近くの三輪小学校遺跡には學大から人頭大の転石が包含されて扇状地端末部の特色を見せ、それを収集している人も近隣にいる。こゝは、地滑りの赤茶けた地肌防災工事の進む地附山が西北にそばだち、約350mの比高差で冷



図1 津島周辺の環境 (1 : 20,000)

たい飯縄おろしを防ぐ日溜りの南傾斜高燥地で、線路をへだてた南辺には湧水の所在をにおわせる段差の痕跡も見られ、水利に恵まれた絶好の住居地域を形成する。線路沿線には数年前まで所々に耕地も点在していたが、現在ではほとんど住宅地に変容している。

2 歴史的環境

大正14年(1925)作製の地籍図によると、本遺跡に南隣して東西に長い「三諸前」の地字が西方に広がり、さらにその南方に「神境」もある。「三諸」はサンジョと呼ばれているらしいが、本来は「神のいる所で、多くは三輪山を指す」(古語辞典)とされるミモロと考えられ、出雲の美和族奉斎神とされる祭神・神社名ともに大和の大神神社に同じ美和神社の神域が北側にある。

この神社は延喜式神名帳に記載された水内9社の筆頭に列する式内社で、記録上の初見は貞観8年(866)2月7日の条に、「三和・神部両神に兵疾の災を防ぐため国師・講師に奉幣読経させた」(意識、三代実録)とある。神部(ミワノベ)神はおそらく三和神とならび祀られていた神であろうとされている。また同書の貞観3年(861)に「二月七日辛亥授信濃国正六位上国業比売神従五位下(上下略)」とある神は、現在美和神社の相殿に祀られており、記録から見ても古くからの美和神社鎮座がうかがわれる。

この神域西に隣接する三輪小学校の校地は昭和50年から3次にわたって発掘調査され、弥生後期～平安時代の遺跡が確認されている。

古い一筋の道がこのような古来からの由緒をもつ神社前から本遺跡南を経て東方約800m地点にある桐原牧神社前にうねうねと通じている。延喜古道もほぼこれにそって、桐原牧神社から吉田大銀杏附近さらに旧稲積村地籍から北上して三才の多古駅家跡へ向ったと考えられている。吉田大銀杏のある地籍は、以前は吉田大宮(現在吉田上町鎮座)の畝地で皇足總命を祭神とし式内社にも比定されている。この畝地は飯縄山をはるかに望む湧泉地で古代祭祀に好適な所でもある。

桐原牧神社附近は牧野(まきの)地籍で、北山抄に「応和元年(961)十一月四日召桐原駒廿正於南庭覽之云々」とある後院領桐原牧は、この桐原中心の牧場を指し、これが文治2年(1186)の乃實末濟庄々にみえる吉田牧になったとも言われ、字木(牛牧の略)・駒弓社・駒沢・三才の地名のほか、桐原牧神社の墓駒神事も旧牧場の名残とされる。

同神社東側に昭和30年ごろまで「ほり田」と呼ばれる水田に囲まれて一段高い耕地があり、明治町村誌には高野氏古城跡と記されている。こゝは応永11年(1404)の市川氏軍忠状に「大將細川兵庫助殿奥御御向向時桐原若榎下芋河之要害責落云々」とある桐原城で、当時これら諸地域は中野を本拠とする高梨氏の傘下にあった。

諏訪御布礼之古書には文明3年(1471)の明年御射山祭頭役に「桐原 惟宗忠国御花礼五貫六百文」と見えている。また同書の長享元年(1487)の条には「字木小井桐原小鹿野長嶋五ヶ村而頭本打替々々勤申候(上下略)」ともあり、当時字木は原源宗、小鹿野(押鐘)は原真高の領有か同

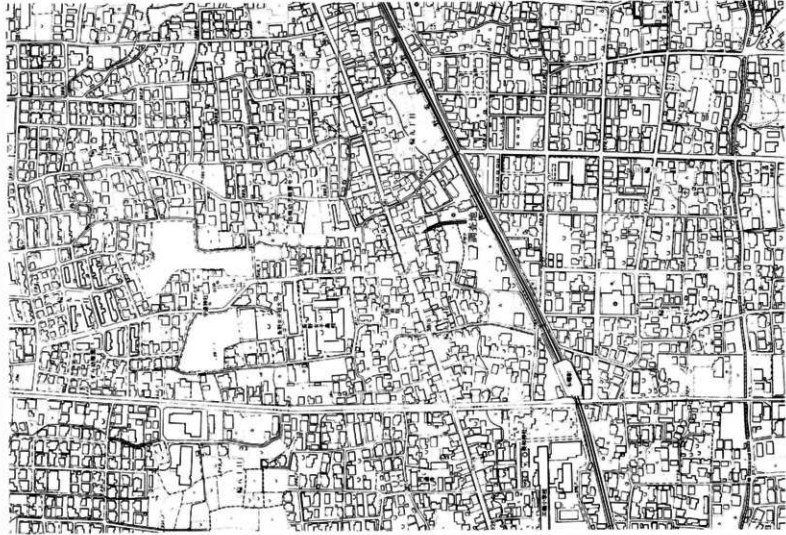


图2 调查对象地 (1:5,000)

条で知られる。宇木城は本遺跡北約1km余の盛伝寺地籍、小井（越）は約1.5km東の中越、押鐘は東北約700m SBC東南隣にそれぞれあり、押鐘城は現在も遺構を残存している。長島は不明であるが返目あたりの古名とする説もある。

これらの居館跡以外に本遺跡西北200mの長野女子高校建設以前には明瞭な遺構があり、相ノ木氏居館跡と呼ばれるが、一説には浅川の氾濫で宇木城がこゝへ移ったとする人もある。さらに南約1kmの国鉄工場敷地には善光寺奉行も勤めた原有源の平林城があるなど、本遺跡を囲む一帯にはいわゆる小名と呼ばれる中世地方武士の本拠が数多い。

これら弱小武士達は時には高梨氏に併呑され、或いは太田庄を本領とする島津氏の蚕食を受けたり、互に協力合力して所領確保に努めたりもした。このように考えるとき応永7年（1400）の大塔合戦において、北信の大勢が反守護軍にまわる中において、宇木・中越氏らが小笠原守護軍に投じた悲願がうかがわれる。

中世武士達の争乱は天文22年（1553）に始まる川中島の戦いでその極に達する。12年間に及ぶ甲越封戦の間謙信は信濃に出撃するたびに横山城を拠点とした。これが本遺跡西約1kmにある城山丘陵上にあった平山城で、約50m余の比高差をもって平地部に臨んでいる。横山城の本郭跡は前方後円墳であるとは衆目の見るところ、現在そこに祭祀されている水内大社は近世末まで善光寺本堂に接して社殿のあった年神堂で、延喜式にある水内郡の名神大社健御方富命神彦別神社はこの神とされている。なお城山は仮寝ヶ丘と呼ばれてもいた。

乱脈だった地域情勢も統一されて近世になると、松平忠輝が松代から越後に移封になった翌慶長16年（1611）に江戸～福島城（直江津）を結ぶ動脈として、それまでの長沼～松代通りにかわって善光寺経由が北国往還となった。これによって通路が整備され横山～吉田間は在来古道より上部に直線的な最短ルートが開通され、散在していた周辺の集落は新しい街道沿いに集められ、吉田には口留番所がおかれ、横山には一里塚が設けられた。

以後近世を通じて加賀藩主をはじめ北陸諸大名の参勤交替及び佐渡金山からの金銀運搬の重要路となると共に、庶民の生活物資の輸送や善光寺参りの旅人などで賑わった。

なおこの三輪地域は、近世初頭に一部地域の善光寺領時代があったものの、近世を通じて善光寺領に接する松代領であった。明治以降は数次にわたる合併を経て大正12年に長野市に併合して今日に至っている。

（参考文献）「上水内郡地質誌」、「上水内郡誌自然篇・歴史篇」、「豊野田研連絡紙No.30」、「信濃史料」

「長野市史」、「長野県町村誌・長野県の地名」、「長野県史」

III 調査内容

1 調査経過と調査概要

(1) 調査の経過

調査は、昭和60年4月10日をもって開始された。試掘時にはかなり浅い位置(地表下30~40cm)に遺構の存在が確かめられていたものの、表土層は畑の耕作により攪乱されているため、バックホーを援用して、20~30cmをめどに、表土を除去することとした。同日より遺構の検出作業に入り、特に西側の地区において遺物の出土が多く見られた。引き続き15日まで実施された検出作業により、遺物の集中出土を見た西側の地区に、住居址・溝・土壇などの遺構の存在が明かとなった。16日から、各遺構の掘り下げ作業に入り、19日には測量作業へと移行した。実測図は、簡易的な遺り方測量に基づき、1:20の縮尺で作成し、住居址内カマド部分に関しては1:10の縮尺を用いた。遺構内の遺物は、覆土上位・中位・床面等出土位置ごとに一括して採取し、主要なものに関しては出土状況写真撮影の後、位置とレベルを実測図に記録した。25日には、全遺構測量作業と遺物の採取とが完了し、発掘作業を終えることとなった。

以降2年次にわたり、調査成果の整理及び報告書作成作業を長野市立博物館において実施し、本書の刊行に至った。

(2) 調査の概要

調査地は、遺構の検出された範囲が畑地として利用されており、わずかに南への傾斜を見せる平坦地となっている。土層は、表土上部が耕作土層、下部が川原石を混じえた暗褐色土層であり、遺構検出面となった地山は、同層が漸移的に砂礫混じりの黄褐色土層へと移行する部分に当たる。また、検出面においては、部分的に砂礫質の極めて強くなる土層が帯状に見られ、扇状地の複雑な堆積状況を示している。遺構検出面は地表下40cmを測り、標高は379.1mとなる。

検出された遺構は、住居址5軒・溝址4本・土壇1基である。5号住居址を切り込んで3号住居址が構築されている以外、遺構の重複は認められない。このうち、4号住居址は古墳時代、1~3・5号住居址は平安時代の所産と判断され、また、平安時代でも5号住居址と1~3号住居址とに時間差を遺物から認めることができる。

以下、遺構と遺物の調査内容については、古墳時代Ⅰ期(4号住)、平安時代古ⅠⅡ期(5号住)、平安時代新ⅠⅢ期(1~3号住)として、時期毎に報告する。その他の遺構については、土壇をⅢ期、4号溝をⅡ期に比定した以外、出土遺物の時代が混在した状況にあるため、特に時期を定めてはいない。

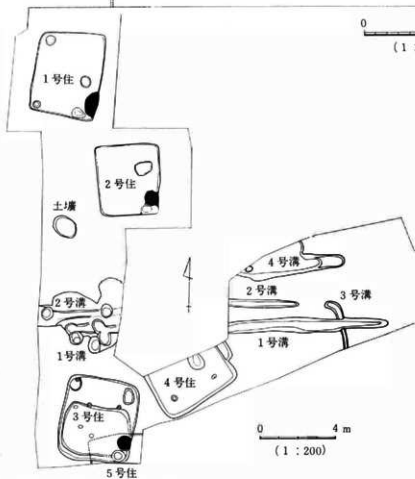
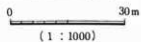
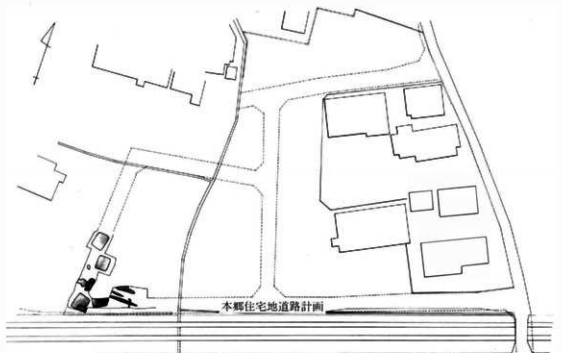


図3 本郷住宅地造成事業計画と発掘調査範囲

2 I期の遺構と遺物

4号住居址

遺構(図4)

一辺4.4mの方形を呈すると考えられるが、北半が調査区域外となり未調査である。壁高は45~55cmをはかり、柱穴が2本検出されている。東壁には、幅50cmほどの張り出しが見られ、その手前床面には径70cm、深さ20cmのピットが存在する。ピット底には、径15cm内外の川原石が4個集積されている。遺物は、土器大破片が破砕された状態で、東壁際と南東隅柱穴付近に集中して見られ、ほとんど床面直上に分布している。なお、南東隅付近床面には、厚さ5cmの焼土の堆積が認められたが、カマド等の構造は確認されていない。

遺物(図5・6)

出土遺物は、土師器・須恵器の土器類に限られる。

土師器は、杯1点を除き、全て甕で占められる。甕は、調整方法からハケメ調整によるもの(1~5)と、ヘラミガキ調整によるもの(6)との2種に分類される。前者は、外面が縦方向のハケメにより調整され、短く外反した口縁部形態を呈する。後者は、外面を縦方向に粗くヘラミガキし、大きく外反した長い口縁部形態を呈し、強いヨコナデにより頸部下に稜線が形成されている。両者とも、内面はナデまたは板状の工具により平滑化されている。杯(7)は、大きく開いた口縁部をもつ扁平な形態を呈し、内面は黒色処理されている。

須恵器は、杯蓋つまみ部分破片と、甕口縁破片であり、全形を知ることはできない。

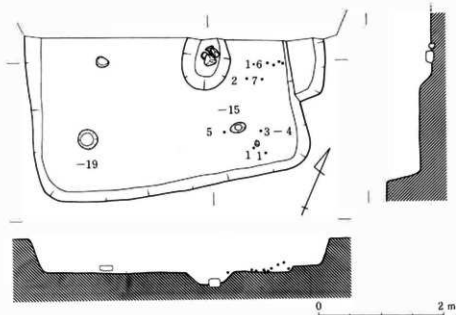


図4 4号住居址(1:60)

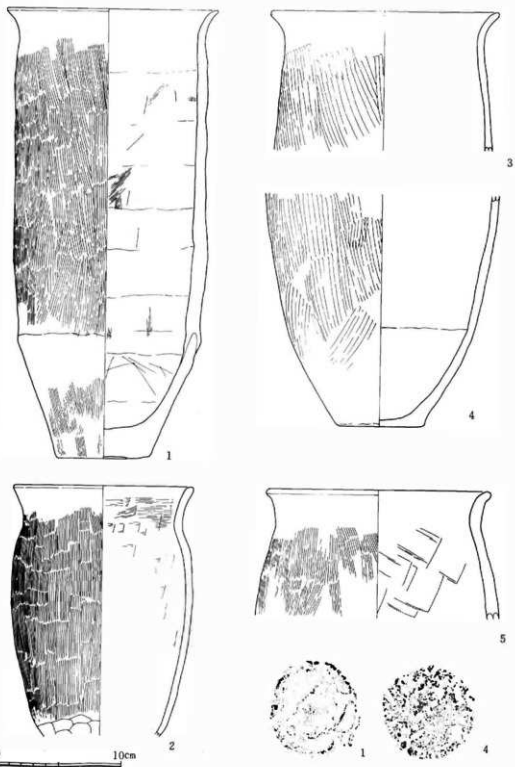


图5 4号住居址出土土器①(1:3)

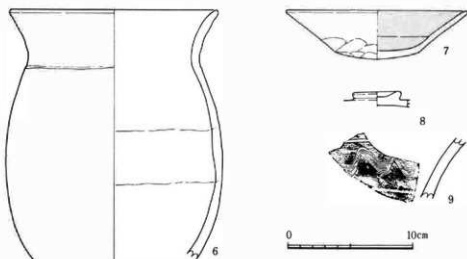


図6 4号住居址出土土器②(1:3)

図 番 号	種 別	器 種	法 量 (cm)			遺 存	成 形・調 整・地 文		備 考
			口径	底径	器高		外 面	内 面	
1	土	袋	16.6	7.5	35.7	寸	ハケ 胴部下位に部分的にナデ	板状工具による調整	内面に黒斑あり 底部木炭痕
2	土	袋	14.1			寸	ハケ 胴部下位にケズリ	板状工具による調整	外面は黒斑がほとんど 内面黒斑あり
3	土	袋	17.7			寸	ハケ	ナデ	外面に黒斑あり
4	土	袋		7.0		寸	ハケ 胴部下位から底部ナデ	ナデ	外面に黒斑あり 底部木炭痕
5	土	袋	17.2			寸	ハケ	板状工具による調整	外面に黒斑あり
6	土	袋	16.3			寸	ミガキ	板状工具による調整	外面に黒斑あり 底部木炭痕
7	土	坏	14.4	6.7	3.9	寸	底部付近～底部静止ケズリ	ミガキ 黒色処理	
8	須	蓋				寸	ロクロ調整	ロクロ調整	外面・内面黒斑あり
9	須	袋				寸	ロクロ調整	ロクロ調整	外面に黒斑あり

I期の遺構は、4号住居址1軒のみであり、遺物も断片的なものとなるため、その詳細については不明な部分が多い。土師器袋に特徴的な長胴化の傾向と縦方向のハケメ調整は、当該地域においては6世紀代から見られ、7世紀へと受け継がれていく形態と調整手法であり、本期はほぼ6世紀後半に位置付けられるものと察しておきたい。共存する土師器杯、あるいは須恵器による検討と分析が今後の課題であり、資料の増加を期するところである。

3 II期の遺構と遺物

5号住居址

遺構(図7)

3号住の床下に検出されたもので、調査範囲外となる部分が多い。北壁中央部と思われる位置にカマドが存在し、それから推定して4m四方の方形を呈するものと思われる。カマドは、上部の構築材が全て破壊されているが、石材を固定するための掘り方と、火床となる焼土面とが遺存

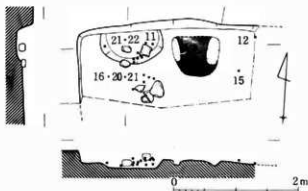


図7 5号住居址(1:60)

しており、該期に一般的な石芯のカマド構造であったらしい。また、カマド横の壁際に長円形の貯蔵穴が存在することも例に漏れない。遺物は、このビット内から集中して検出された。

遺物(図8・9)

須恵器は瓶の頸部破片(10)と坏(11~13)が出土している。杯は細かいロクロ調整痕を体部に残し、底部は回転糸切り痕をそのままに残す。焼成はやや軟質であり、灰白色に近い色調を呈する。

土師器は、坏・小形甕・甕が出土している。坏(14)は、ロクロ調整により、底部は回転糸切り痕をそのままに残し、内面は黒色研磨されている。小形甕(15)は、ロクロ調整により、底部は回転糸切りのまま未調整である。甕(16~23)は、8個体以上が出土しており、外面上半部にロクロ調整痕を残し、下半を縦方向にヘラケズリするもので、肥厚して受口状となる口縁部と、砲弾形の体部が共通する形態である。内面の調整は、上半部にロクロ回転によるハケメ(カキメ)、下半部にハケメが残されることが一般的であるが、上半部にカキメを施さないもの(19~22)も見られる。

番号	種別	器種	法量(cm)			遺存	成形・調整・他
			口径	底径	器高		
10	須	瓶	13			±	
11	須	杯	12.0	5.6	4.0	完	底一糸切
12	須	杯	12.6	5.8	4.0	完	底一糸切
13	須	杯	12.3	6.0	4.0	±	底一糸切
14	土	杯		7.4		±	内面ニダキ・黒色処理
15	土	小甕	12.8	6.3	10.7	±	底一糸切
16	土	甕	19.4			±	内面一ハケ
17	土	甕	20.1			±	内面一ハケ
18	土	甕	20.0			±	外面ケズリ 内面カキメ
19	土	甕	21.8			±	
20	土	甕	19.6			±	外面ケズリ 内面ナシ
21	土	甕	23.8	3.3	31.3	±	外面ケズリ 内面ハケ
22	土	甕	24.4			±	外面ケズリ
23	土	甕	22.8			±	外面ケズリ 内面カキメ

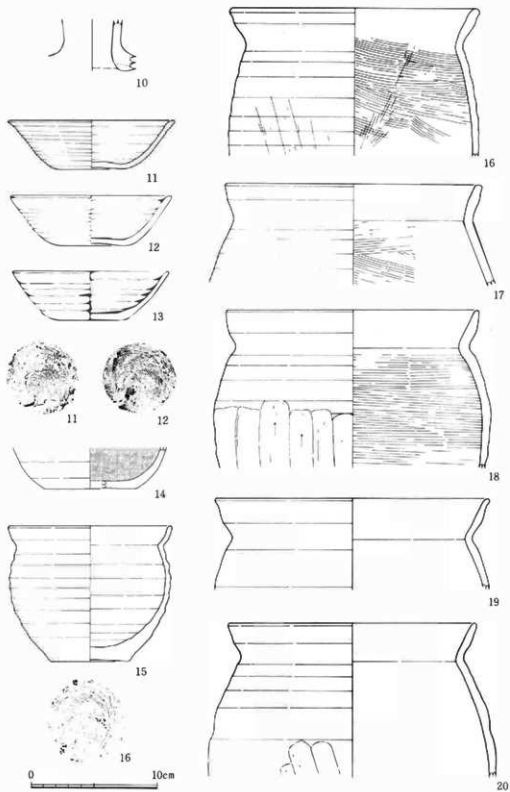
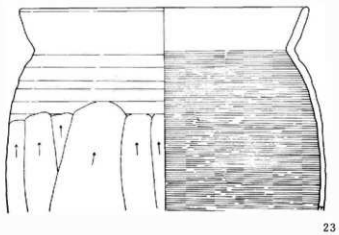
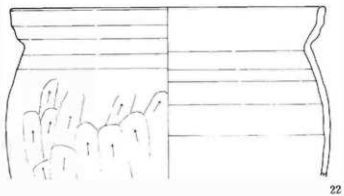
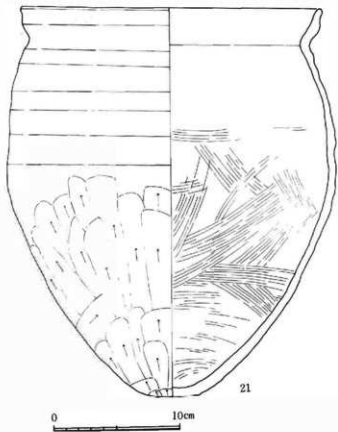


图8 5号住居址出土土器①(1:3)

图9 5号住居址出土土器②(1:3)



4号溝址

遺構 (図10)

調査区東側に集中して検出された溝址のうち、最北端に位置する。北側は調査区域外となり全形は不明となっているが、幅60cmの溝状部分と、竪穴状の部分により構成され、住居址に溝が重複したものである可能性が考慮される。溝状の部分は、深さ10~15cm、竪穴状の部分は、深さ25cm内外を測る。遺物は、主に竪穴状の部分から出土しており、底面も平坦な床状を呈するため、同部分が住居址となる可能性は高い。

遺物 (図10)

土師器環・高台環・甕・須恵器蓋・高台環などが出土している。土師器環は、ロクロ調整により、内面が黒色研磨されている。

底部は、回転糸切りの後、静止ヘラケズリにより調整したもの(24)と、無調整のもの(25)とが存在する。高台環(26)は、底部を回転ヘラケズリした後に高台を付している。

番号	種類	法量 (cm)			遺存	成形・調整・他
		口径	底径	器高		
24	土杯	13.0	5.7	4.3	1/4	内面ニテハ・黒色研磨 底ニ高台
25	土杯	17.0	7.2	4.7	1/4	内面ニテハ・黒色研磨 底ニ高台
26	土台杯	14.1			1/4	内面ニテハ・黒色研磨 底ニ高台
27	須杯	11.0	5.7	4.0	1/4	底ニ糸切
28	須蓋	9.8			1/4	
29	須台杯		7.6		1/4	底ニ糸切・回転ケズリ
30	土甕	12.0			1/4	内面ニナデ
31	土甕	21.2			1/4	内面ニウキノ
32	土甕	24.2			1/4	
33	須瓶	9.2			1/4	
34	須甕					

II期の遺構は住居址1軒と、住居址となる可能性もある溝址であり、断片的な検出にとどまるものであるが、出土遺物は比較的豊富であり、その様相を検討することは可能である。

出土した土器は、土師器甕・環、須恵器環を主体として構成される。土師器甕は、北陸地方で成立したと考えられるロクロ調整を用いたもので、当該地においては、平安時代を代表する甕の一型式となる。成立初期のものは、須恵器的な口縁部形態を踏襲するが、本期におけるそれは、端部が丸く仕上げられ、肥厚した受口状を呈する形態となり、後出的な要素を認めることができる。土師器環も、甕と軌を一にしてロクロ調整へ変換すると思われるが、本期のものは、底部回転糸切り痕をそのままに残し無調整であることから、後出的な要素が指摘される。須恵器環は、焼成がやや悪く、口縁部が外反きみとなり、底部は径が小さく回転糸切り痕がそのままに残される。灰釉陶器の出現により、粗雑化し、消滅する須恵器の末期的な特徴が一部に表われており、土師器の示す時代相に合致する。

灰釉陶器の伴出を確認していないが、以上の様相は灰釉陶器が搬入され一般化する段階に位置付けて大過ないものと考え、ほぼ10世紀代の所産としておきたい。

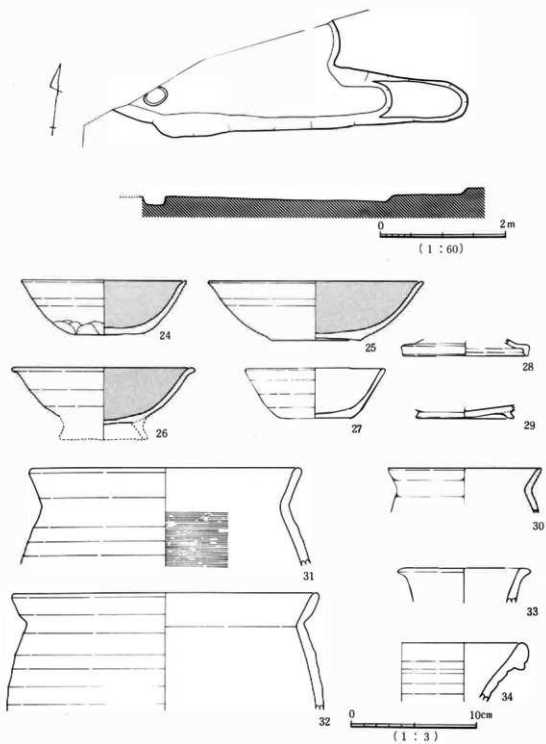


图10 4号溝址と出土土器

4 III期の遺構と遺物

1号住居址 遺構(図11)

4.5×3.6mの長方形を呈し、壁高は15cm内外を測る。長辺の東壁南隅よりカマドを有し、カマド南側に貯蔵穴が存在する。床面は堅く、北西隅・南西隅と、東壁よりの中央部にピットが存在する。カマドは径20cm程度の角礫を芯として、若干壁外に張り出す形であったらしいが、ほとんど原形を保っておらず、深さ10cmの2か所の掘り込み周辺に礫と遺物・焼土が散乱した状況にある。カマド横の貯蔵穴は、長径90cmの長円形で、深さは20cmを測り、内部には遺物が転落した状態で検出されている。遺物は、カマドと貯蔵穴の周辺に集中するほか、北壁、西壁際にも集中地点が見られる。出土レベルは、一部を除き床面とその直上に位置する。

番号	種別	器種	法量			遺存	成形・調整・他	番号	種別	器種	法量			遺存	成形・調整・他
			口径	底径	器高						口径	底径	器高		
35	土	環	9.6	4.5	2.7	完	底一糸切	54	土	環	13.2	5.0	5.0	完	底一糸切
36	土	環	9.7	4.5	3.2	$\frac{3}{4}$	底一糸切	55	土	環	14.2	5.5	5.8	寸	底一糸切
37	土	環	10.2	4.2	3.2	$\frac{1}{2}$	底一糸切	56	土	環	12.2	5.2	5.1	$\frac{1}{2}$	
38	土	環	10.2	3.8	3.5	$\frac{1}{2}$	底一糸切	57	土	環	12.8	5.2	5.4	完	内面一ニガキ・黑色処理 底一糸切
39	土	環	10.2	4.6	3.3	$\frac{1}{2}$	底一糸切	58	土	台環		6.6	$\frac{1}{2}$	底一糸切・ナデ	
40	土	環	10.5	4.6	3.4	完	底一糸切	59	土	台環	10.3	5.6	3.8	完	内面一ニガキ・黑色処理 底一ナデ
41	土	環	10.5	4.5	3.3	$\frac{3}{4}$	底一糸切	60	土	台環	11.1		$\frac{1}{2}$	内面一ニガキ・黑色処理	
42	土	環	10.5	5.3	3.5	完	底一糸切	61	土	台環	13.6		$\frac{1}{2}$	内面一ニガキ・黑色処理	
43	土	環	10.8	5.2	3.0	完	底一糸切	62	土	台環	14.3		$\frac{3}{4}$	内面一ニガキ・黑色処理	
44	土	環	10.8	3.9	3.1	$\frac{3}{4}$	底一糸切	63	土	台環		6.5	$\frac{1}{2}$	内面一ニガキ・黑色処理 底一糸切	
45	土	環	10.8	5.6	3.0	完	底一糸切	64	土	台環	13.4	6.1	6.0	$\frac{3}{4}$	内面一ニガキ・黑色処理 底一糸切
46	土	環	10.8	5.8	3.4	完	底一糸切	65	土	台環	14.2	7.2	6.3	$\frac{3}{4}$	内面一ニガキ・黑色処理 底一糸切
47	土	環	10.9	5.0	3.4	$\frac{3}{4}$	底一糸切	66	灰	椀	17.0	7.5	6.3	$\frac{1}{2}$	底一糸切 内面自然釉、漆掛け
48	土	環	11.1	4.0	3.5	$\frac{1}{2}$	底一糸切	67	灰	椀	15.5	8.3	6.3	$\frac{1}{2}$	漆掛け
49	土	環	11.1	4.8	3.6	$\frac{3}{4}$	底一糸切	68	土	甕	16.5		$\frac{1}{2}$		
50	土	環	12.2	5.0	4.7	完	底一糸切	69	土	甕	14.8		$\frac{1}{2}$	外面一ケズリ	
51	土	環	12.5	5.3	3.8	$\frac{1}{2}$	底一糸切	70	土	甕	21.6		$\frac{1}{2}$		
52	土	環	12.6	4.7	3.7	完	底一糸切	71	土	甕	24.8				
53	土	環	13.4	6.2	3.6	$\frac{3}{4}$	底一糸切								

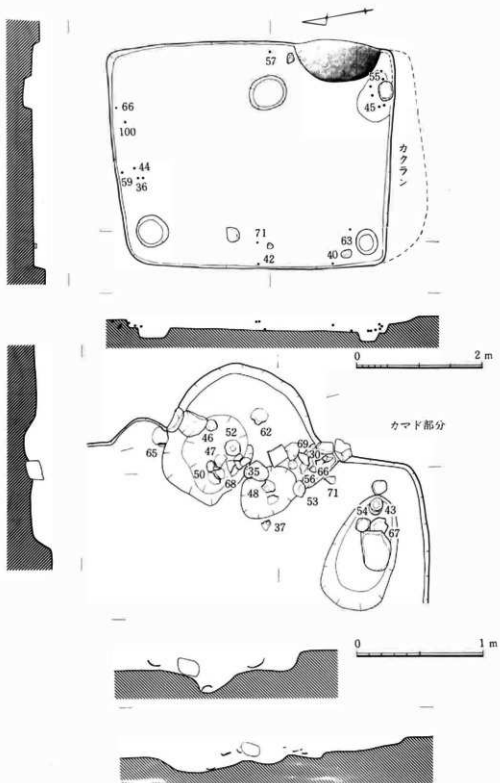


図11 1号住居址 (1:60)

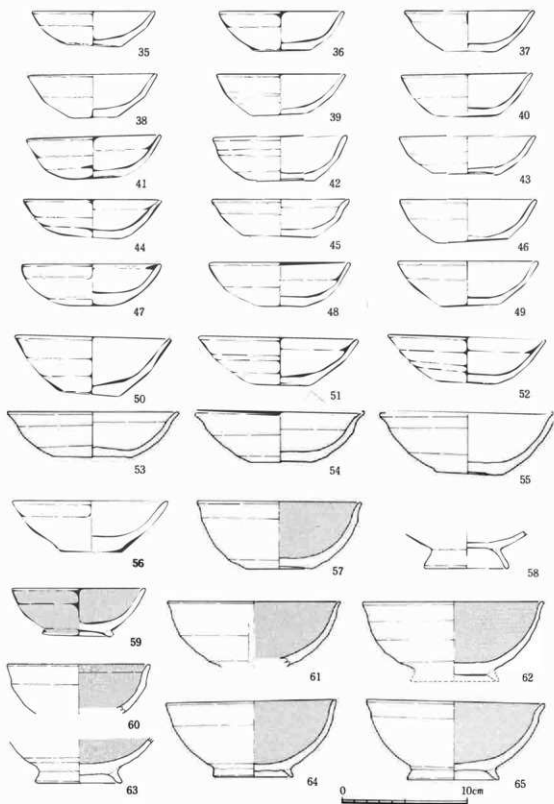


图12 1号住居址出土土器①(1:3)

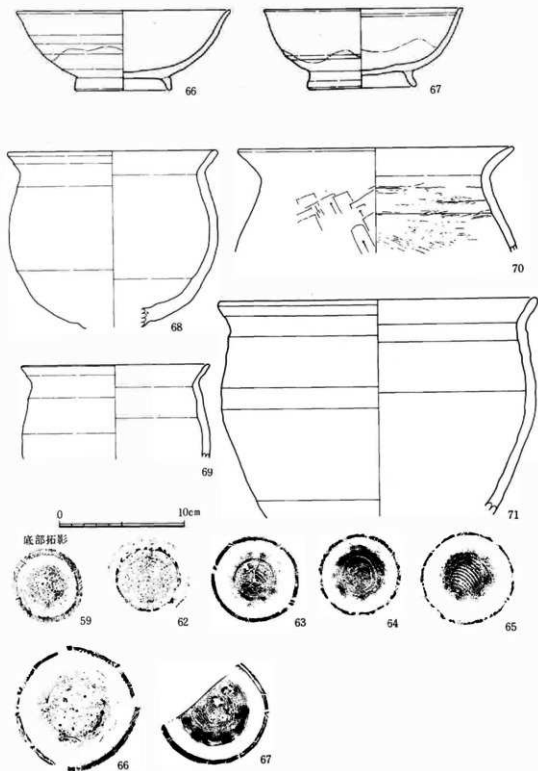


图13 1号住居址出土土器②(1:3)

底部拓影

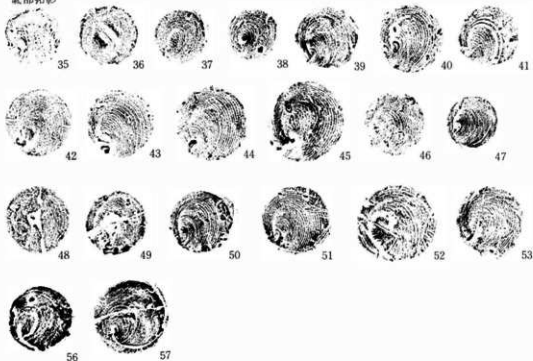


図14 1号住居址出土土器③(1:3)

1号住居址 遺物(図12~14)

土師器・灰軸陶器が出土している。以下器種分類を試みる。

土師器杯 底部に回転糸切痕をそのままに残すもので、内面がロクロ調整のまま無調整のものをA類、黒色処理されるものをB類(57)とする。A類は、口径から更にA1類~A3類に分類される。10cm以下-A1(35・36)、10~12cm-A2(37~49)、12cm以上-A3(50~56)

土師器高杯台(61~65)内面がヘラミガキ調整・黒色処理され、器高の高い椀形を呈する。口径は14cm内外を測る。その他、内外面黒色処理されるもの(59)や小形品と思われるもの(60)、高台が高く皿形を呈すると思われるもの(58)が存在する。

土師器甕(68~71)全形を知りうるものがないが、ロクロ調整により、大形品と小形品が存在する。口縁部は短く外反し、平底を呈するものと予想される。カキメによる2次調整は存在しないが、雑なヘラケズリを外面に施したもの(70)が存在する。

灰軸陶器椀(66~67)両者とも、軸が潰け掛けられるが、66は内面全体に自然軸が掛かる。口縁端部はわずかに外反し、67は内面に沈線がめぐる。高台は弧状を呈し、回転ケズリの後に付けられている。なお、66は回転ケズリ痕をナデにより再調整している。

2号住居址 遺構(図15)

3.5×3.4mの方形を呈し、壁高は30cmを測る。東壁南隅寄りに、川原石を芯としたカマドを有し、その南側に深さ10cmの貯蔵穴が存在する。床面は軟弱であり、径90cmのビットが検出されている。同ビットは出土遺物から住居構築以前の別遺構である可能性が高い。カマドは比較的遺存状況が良好であり、壁外に張り出した長さ1.5mの煙道が確認される。遺物は、カマド内のほかに住居址覆土中に多数包含されており、床面よりかなり浮いた状態のものが多い。

番号	種別	器種	法量			遺存	成形・調整・他	番号	種別	器種	法量			遺存	成形・調整・他
			口径	底径	器高						口径	底径	器高		
72	土	環	10.2	5.5	3.4	寸	底一条切	97	土	台環	7.0		寸	内面：ガキ・黒色処理 裏一条切	
73	土	環	10.4	4.7	3.1	寸	底一条切	98	土	台環	6.6		寸	内面：ガキ・黒色処理 裏一条切	
74	土	環	10.4	3.5	3.6	番	底一条切	99	灰	皿	11.4	6.2	2.5	寸	底一条切 漬け掛け
75	土	環	10.8	5.4	3.2	番	底一条切	100	灰	皿	13.0			寸	漬け掛け
76	土	環	10.8	5.0	3.4	完	底一条切	101	灰	椀	7.3			寸	
77	土	環	10.8	4.9	2.8	寸	底一条切	102	灰	椀	10.2			寸	刷毛ぬり
78	土	環	11.0	4.6	3.7	完	底一条切	103	灰	椀	13.8			寸	刷毛ぬり
79	土	環	11.0	6.0	3.3	寸	底一条切	104	灰	椀	7.7			寸	底一ナデ 刷毛ぬり
80	土	環	11.1	5.1	3.5	寸	底一条切	105	灰	椀	16.6	7.8	6.1	番	裏 木目回転ケズリ 漬け掛け
81	土	環	11.1	5.0	3.6	完	底一条切	106	灰	椀	6.9			寸	底一ナデ
82	土	環	11.0	6.4	3.5	寸	底一条切	107	灰	椀	7.6			寸	底一ナデ
83	土	環	11.2	6.0	3.5	寸	底一条切	108	灰	甌	11.2			寸	
84	土	環	11.2	4.7	3.5	番	底一条切	109	土	甕	18.6			寸	
85	土	環	11.4	5.2	3.3	寸	底一条切	110	土	甕	15.6			寸	
86	土	環	11.6	6.0	3.3	寸	底一条切	111	土	甕	10.0			寸	
87	土	環	12.4	5.5	3.8	番	底一条切	112	土	環	12.2	6.2	5.0	番	内面：ガキ・黒色処理 裏一条切
88	土	環	14.6			寸		113	須	環	12.2	6.2	3.6	寸	底一条切
89	土	環	11.8	5.2	3.9	寸	内面：ガキ・黒色処理 裏一条切	114	須	台環	12.0			寸	底一条切・回転ケズリ
90	土	環	14.0	6.6	5.5	寸	内面：ガキ・黒色処理 裏一条切	115	須	台環	14.0	9.3	6.2	寸	
91	土	台環	11.4	5.2	4.8	番	内面：ガキ・黒色処理 裏一条切	116	須	台環	7.4			番	底一回転ケズリ
92	土	台環	14.0			寸	内面：文・黒色処理 裏一条切	117	須	蓋				寸	天一回転ケズリ
93	土	台環	5.0			番	内面：ガキ・黒色処理 裏一条切	118	須	蓋	9.6			寸	天一回転ケズリ
94	土	台環	6.6			番	内面：ガキ・黒色処理 裏一条切	119	須	蓋	12.8			寸	天一回転ケズリ
95	土	台環	14.0			寸	内面：ガキ・黒色処理 裏一条切	120	須	壺	9.0			寸	自然軸
96	土	台環				寸	内面：文・黒色処理 裏一条切								

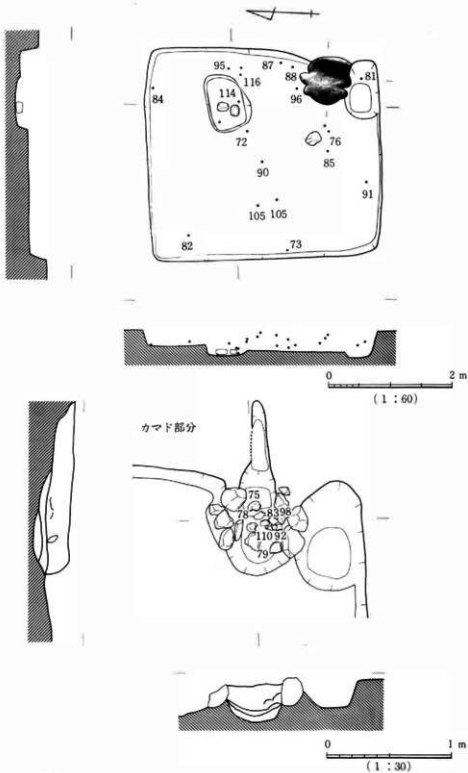


図15 2号住居址

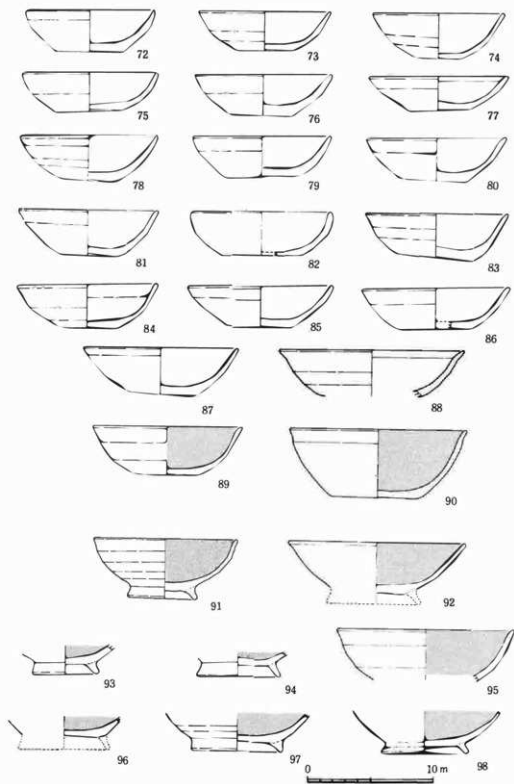


图16 2号住居址出土土器①(1:3)

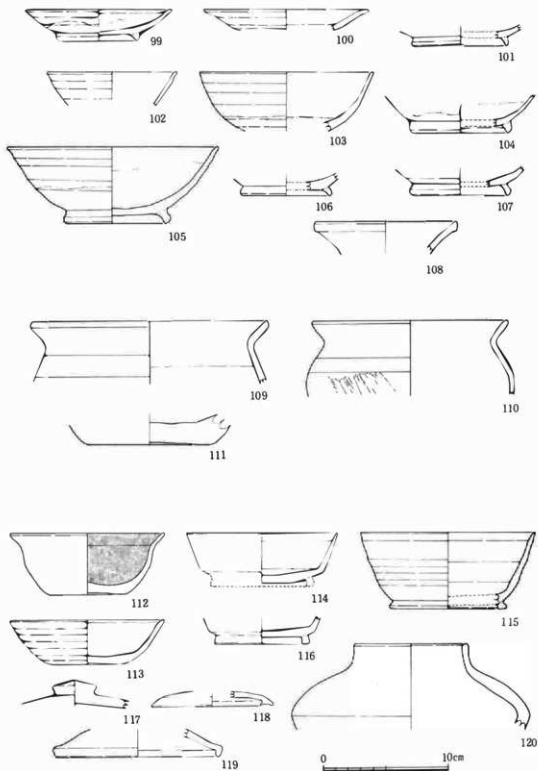


图17 2号住居址出土土器②(1:3)

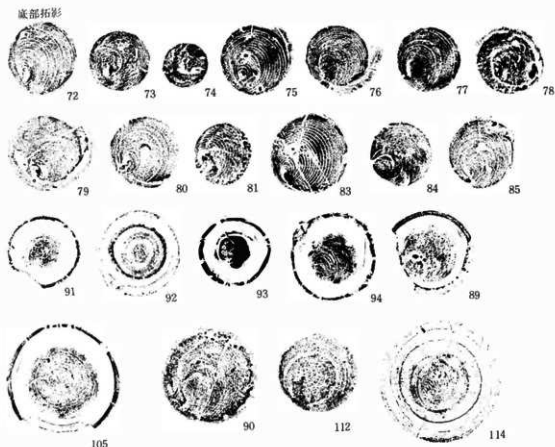


図18 2号住居址出土土器③(1:3)

2号住居址 遺物(図16~18)

土師器・灰軸陶器と、混入品と判断される須恵器が出土している。以下の器種分類の内、土師器環に関しては1号住居址に準ずる。

土師器環 A2(72~86)、A3(87・88)と内面黒色処理されたB(89・90)に分類される。B類は、内面が放射状にミガキ調整されている。112は、混入品と判断される。

土師器高台環(91~98)内面がヘラミガキ調整・黒色処理され、口径12cm以下の小形品と14cmの大形品が確認される。ヘラミガキは、97が放射状に、92・96は暗文として施されている。

土師器甕(109~111)口縁が短く外反し、110は外面がクロコ調整の後ヘラケズリされる。灰軸陶器(99~108)皿(99)、椀(105)が確認される。施軸方法には、刷毛塗りと漬け掛けが存在する。後者は混入品である可能性がある。高台は、内面がやや内湾した三日月高台の退化した形態をとり、底部は回転ヘラケズリにより調整されている。

須恵器(113~120)別遺構の可能性が高い床面ビットに伴う遺物と判断される。

3号住居址

遺構 (図19)

4.4×4.0mの方形を呈し、壁高は30cmを測る。内部に3.5×2.6mの長方形の掘り込みが存在し、床面が2段構造をなすものである。床面は軟弱であり、北東と北西隅に径70cm、深さ10cmのピットを有するほか、内側の掘り込みによる北壁にも、柱穴と判断される1.5m間隔の2つのピットが存在する。カマドは東壁南隅よりに位置し、構築材と思われる角礫が崩壊した状況にあり、やや凹みをなす燃焼部と壁外に伸びた煙道の一部が遺存している。遺物はカマド内のほかに、床面とその直上から多く検出されている。

遺物 (図20~24)

土師器・灰軸陶器・緑軸陶器が出土している。以下の器種分類のうち、土師器環に関しては1号住居址に準ずる。

土師器環 A1 (121~145)、A2 (146~153)、A3 (154~159) に分類される。

土師器高台環 口径12cm以下のものを小形品(160~167)、13~16cmのものを大形品とする。大形品は、内面が黒色処理されないA類、黒色処理されるB類に分類され、このうちヘラミガキ調整によるものをA1(168・169)・B1(170~177)、無調整のものをA2(178~180)・B2(183~192)とする。A1とB1の170・171には放射状のヘラミガキが内面に施される。

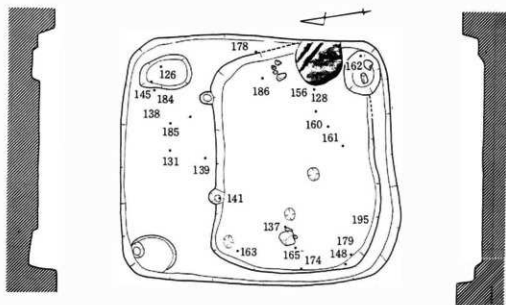
土師器甕(200・201) 羽釜と推定され、胎土は内耳土器のそれに近似する。

灰軸陶器 椀皿(194)、皿(195)、殺皿(196・197)、椀(198)が存在する。椀皿・椀は無軸、そのほかは漬け掛けにより施軸される。底部には糸切痕が残され、高台は三角高台となる。

緑軸陶器(199)混入品の可能性が高い。底部を除き施軸され、黄白色を呈し極めて軟質である。

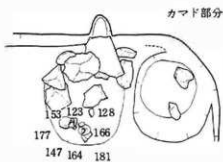
番号	器種	法量			遺存	成形・調整・他	番号	器種	法量			遺存	成形・調整・他
		口径	底径	器高					口径	底径	器高		
121	土環	9.6	5.6	1.6	寸	底一糸切	132	土環	9.2	4.5	2.4	寸	底一糸切
122	土環	8.5			寸		133	土環	9.2	4.8	2.5	寸	底一糸切
123	土環	8.5	4.2	2.5	完	底一糸切	134	土環	9.4	4.0	2.4	寸	底一糸切
124	土環	8.7	3.8	2.5	寸	底一糸切	135	土環	9.4	4.5	2.0	寸	底一糸切
125	土環	8.8	3.2	2.0	寸	底一糸切	136	土環	9.4	3.8	1.8	寸	底一糸切
126	土環	8.8	3.8	2.0	寸	底一糸切	137	土環	9.4	4.5	2.7	寸	底一糸切
127	土環	9.0	4.2	2.5	寸	底一糸切	138	土環	9.5	4.0	2.0	完	底一糸切
128	土環	9.0	3.9	2.5	寸	底一糸切	139	土環	9.5	4.0	2.6	完	底一糸切
129	土環	9.0	4.8	2.1	寸	底一糸切	140	土環	9.5	4.7	2.4	寸	底一糸切
130	土環	9.1	3.7	2.0	完	底一糸切	141	土環	9.6	3.8	2.5	寸	底一糸切
131	土環	9.1	4.5	2.3	完	底一糸切							

番号	種別	器種	法量			遺存	成形・調整・他	番号	種別	器種	法量			遺存	成形・調整・他
			口径	底径	器高						口径	底径	器高		
142	土	環	9.6	4.3	2.4	寸	底一条切	172	土	台環		6.5		寸	内面:ニガキ・黒色処理 底一条切・ナデ
143	土	環	9.7	4.7	2.6	寸	底一条切	173	土	台環		6.5		寸	内面:ニガキ・黒色処理 底一条切・ナデ
144	土	環	9.8	3.3	2.8	寸	底一条切	174	土	台環	14.2	8.0	5.8	寸	内面:ニガキ・黒色処理 底一条切・ナデ
145	土	環	9.8	4.0	2.6	寸	底一条切	175	土	台環	15.6	6.5	6.6	寸	内面:ニガキ・黒色処理 底一条切・ナデ
146	土	環	10.0	3.6	3.2	寸	底一条切	176	土	台環	15.0			寸	内面一:ニガキ・黒色処理
147	土	環	10.2			寸		177	土	台環	15.5			寸	内面一:ニガキ・黒色処理
148	土	環	10.5	4.2	3.2	寸	底一条切	178	土	台環	13.7	6.2	4.4	寸	底一ナデ
149	土	環	11.7	4.5	3.5	寸	底一条切	179	土	台環	13.4	6.2	5.9	寸	底一ナデ
150	土	環	11.4	3.9	3.3	寸	底一条切	180	土	台環	14.1	6.4	5.4	寸	底一ナデ
151	土	環	11.7	5.5	3.2	寸	底一条切	181	土	台環	15.3	5.7	6.9	寸	底一ナデ
152	土	環	12.7	5.7	4.4	寸	底一条切	182	土	台環	17.3			寸	
153	土	環	12.7	3.8	3.5	寸	底一条切	183	土	台環	14.1	6.5	5.1	寸	底一ナデ 内面一黒色処理
154	土	環	12.1	5.1	4.0	完	底一条切	184	土	台環	15.0	6.4	5.4	完	底一ナデ 内面一黒色処理
155	土	環	12.5	5.0	3.6	完	底一条切	185	土	台環	14.0	6.4	5.6	寸	底一ナデ 内面一黒色処理
156	土	環	13.7	6.4	3.9	寸	底一条切	186	土	台環	14.6	6.1	5.9	寸	底一ナデ 内面一黒色処理
157	土	環	13.7	5.1	4.5	寸	底一条切	187	土	台環	14.2	6.5	5.8	完	底一ナデ 内面一黒色処理
158	土	環	14.9	5.4	3.7	寸	底一条切	188	土	台環		6.2		寸	底一ナデ 内面一黒色処理
159	土	環	9.3	5.8	4.8	寸	底一条切	189	土	台環	15.2			寸	内一黒色処理
160	土	台環	9.2	5.5	2.5		底一ナデ	190	土	台環	14.2			寸	内一黒色処理
161	土	台環	9.9	4.5	2.5		底一ナデ	191	土	台環	13.4			寸	内一黒色処理
162	土	台環	10.3	5.2	3.7		底一ナデ	192	土	台環	14.7			寸	内一黒色処理
163	土	台環	11.9	5.3	3.7		底一ナデ	193	土	台環	17.6			寸	底縁高 内面一:ニガキ・黒色処理
164	土	台環		6.1	3.8		底一ナデ	194	灰	段皿	9.8	5.4	3.0	寸	内面一自然釉 底一条切・ナデ
165	土	台環		5.5			底一条切・ナデ	195	灰	皿	12.1	6.8	2.5	完	濃汁掛け 底一条切・ナデ
166	土	台環		5.1			底一ナデ	196	灰	段皿	12.5	6.3	2.1	寸	濃汁掛け 底一条切・ナデ
167	土	台環		5.9			底一ナデ	197	灰	段皿	14.1	6.7	2.6	寸	濃汁掛け 底一ナデ
168	土	台環	15.5	7.8	5.3		内面一:ニガキ 底一ナデ	198	灰	碗	14.5	6.0	5.6	寸	底一ナデ
169	土	台環	15	6.2	5.		内面一:ニガキ 底一条切・ナデ	199	緑	碗		7.3		寸	底一ナデ 釉彩剥離
170	土	台環		6.4			内面一:ニガキ・黒色処理 底一ナデ	200	土	羽釜		12.2		寸	
171	土	台環	13.6	6.7	4.8		内面一:ニガキ・黒色処理 底一ナデ	201	土	羽釜	19.0			寸	



0 2 m

(1 : 60)



0 1 m

(1 : 30)

図19 3号住居址

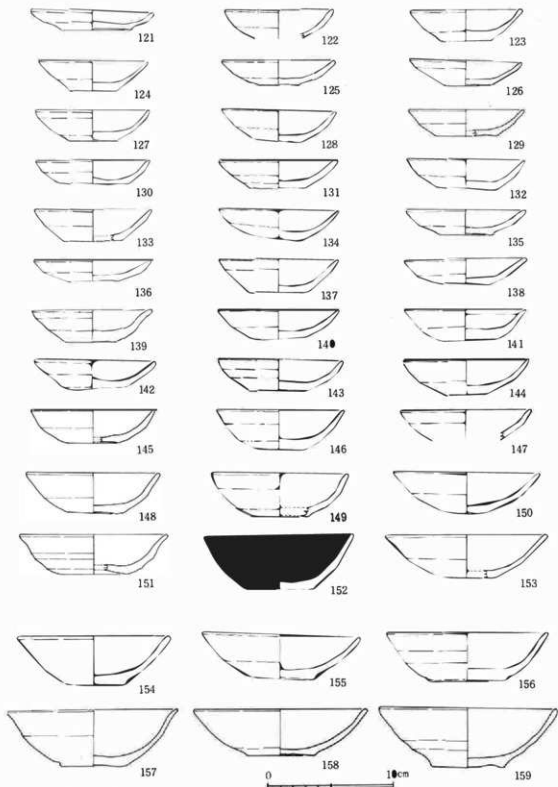


图20 3号住居址出土土器①(1:3)

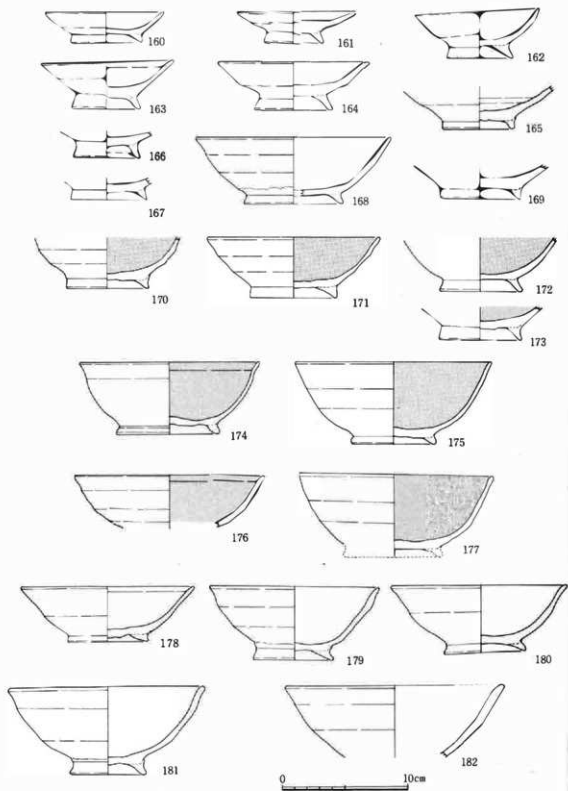


图21 3号住居址出土土器②(1:3)

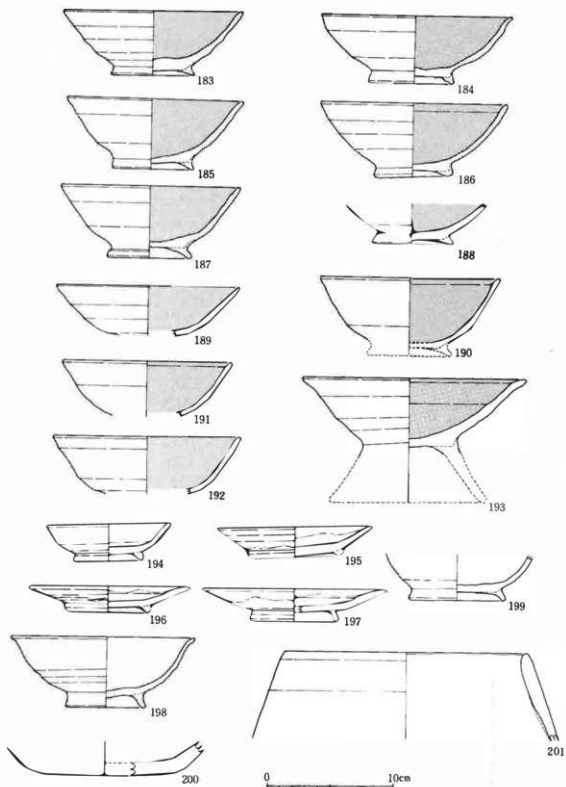


图22 3号住居址出土土器③(1:3)

底部拓影

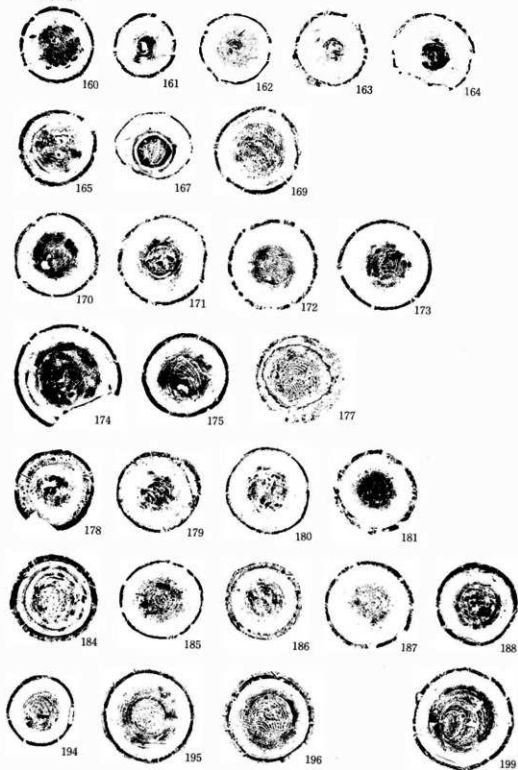


图23 3号住居址出土土器④(1:3)

底部拓影

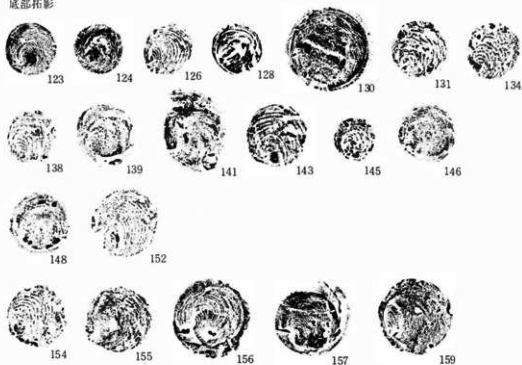


図24 3号住居址出土土器⑤(1:3)

土壌(図25)

1.4×1.0mの長円形を呈し、深さは10cmを測る。底面からやや浮いた状態で、土師器環A2(202・203)、A3(204・205)が出土している。2号住居址と近接した位置にあり、その関連性が考慮される。

番号	種類	法量			遺存	成形・調整・他
		口径	底径	器高		
202	土環	10.2	4.3	3.3	土	底一切
203	土環	10.2	4.3	3.3	土	底一切
204	土環	12.6	6.5	3.9	土	底一切
205	土環	12.6			土	

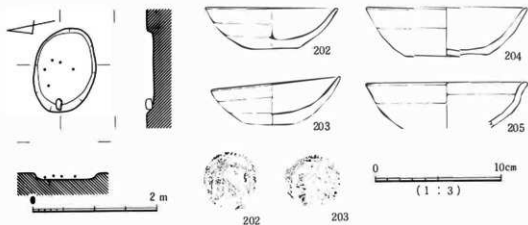


図25 土壌と出土土器(1:60)

Ⅲ期の遺構は、住居址3軒と土竈1基であり、いずれの遺構も全形が検出され、出土遺物も豊富であることから、該期の良好な資料として提示することができる。

住居址構造は、規模4m内外の方形を呈し、床面に明確な柱穴が認められず、カマドが東壁の南東隅寄りに位置し、その南側に貯蔵穴を有する点において共通した特徴を抽出することができる。住居址規模が小形化し、カマドが隅角付近に位置する傾向は、平安時代後半における一般的な現象と理解され、1～3号住居址に指摘される共通の特徴は、本期の住居址構造を表徴するものとして把握される。

出土土器は、土師器・灰釉陶器に限られ、須恵器は伴出しないと判断される。また1・2号住居址と3号住居址の出土土器を比較すると、連続性のなかにも時間的な前後関係による様相の相違が確認されるため、1・2号住居址資料を古段階、3号住居址資料を新段階として把握することとする。

古段階

年代の目安となる灰釉陶器は、2号住居址出土の一部を除き、漬け掛けによる施釉、退化した三日月高台あるいは三角高台の特徴を有する。碗のうち深い体部を有する67は、口縁内面の沈線と、やや外に開く断面二等辺三角形に近い高台の形態的要素から、東山72号窯式あるいは虎溪山1号窯式に比定される。胎土から、恐らくは猿投窯の製品であろう。その他は、美濃窯製品と推定され、同期を前後する窯式に該当させて矛盾はない。

土師器環は、内面無調整のA類のうち、中形のA2(37・49・72・86)が主体となり、これにA3と、少数のA1、例外的にB類が加わる。

土師器高台環は、新段階におけるB1に近似するが、内面黒色処理とヘラミガキ調整が比較的丁寧であり、深い体部を有する碗形(61・65)が特徴的である。

土師器甕は、断片的資料からみて、Ⅱ期に見られたロクロ調整ヘラケズリによる甕の承継を持ちながら、体部が短くなり、平底化するものと推定され、ほぼ消滅する傾向が指摘される。

新段階

灰釉陶器は、漬け掛けによる施釉と、無釉のものが存在し、高台は三角高台が主流である。無釉の碗と椀皿(198・195)は、美濃窯における丸石2号窯式に比定して大過無いものと考えられる。その他も同期を前後する窯式に該当させて矛盾はない。

土師器環は、内面無調整のA類に限られ、過半が小形のA1(121・145)により占められる。古段階の小形化傾向が更に顕在化したものであり、中世「カワラケ」の原形を見ることができる。

土師器高台環は、多様な構成が見られ、灰釉椀皿の模倣品としての小形品(160・167)が登場し、内面黒色処理されながらヘラミガキ調整を消失させたB2(183・192)、黒色処理をも消失させたA2(178・180)が主体となり、新段階より更に粗雑化する傾向が指摘される。

以上の土器様相から、環の小形化、高台環の灰釉陶器模倣、甕の消失化という土師器解体過程が読み取れよう。その実年代に関しては、灰釉陶器の年代観より、11世紀代に比定しておきたい。

5 その他の遺構と遺物

1～3号溝址 (図26・27)

調査地の中央部、1・2号住居址と3・4号住居址とを境界する形で、東西方向に横切る溝群であり、3号溝址のみL字形に南北方位を取り、かつ1号溝址と重複している。1・2号溝址は、未掘部分をはさんで東西に分断されており、西側部分は、明確な溝状とならず、大小のピットが重なり、変形した形で検出されている。また、東側部分の東端において遺構として収束をみるが更に東へと連続し低湿地へと伸びていたことが予想され、排水を機能とした溝であった可能性が高いものといえる。溝の深さは、最深50cmを測る。溝の覆土には、大小の土器片が包含されており、特に1・2号溝址の東側部分にその大部分が集中して見られた。出土土器は各期のものが含まれるが、Ⅲ期に該当するものが多く、該期に属する可能性が指摘される。

検出面出土遺物 (図28・29)

遺構に伴わず、遺構検出の際に出土したものを一括した。

Ⅰ期に該当する土師器(232～238)、Ⅱ期に該当する土師器(255～259・265)、Ⅲ期に該当する土師器・灰釉陶器(260～264・266～270)が出土しているほか、Ⅱ期をさかのぼる奈良時代所産の須恵器類(239～254)が確認される。調査においては遺構の検出を見ないが、遺跡内に該期の集落が存在する可能性を示唆している。

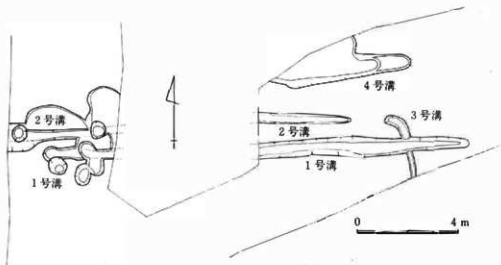


図26 1・2・3号溝址 (1:150)

番号	種別	法量			遺存	成形・調整・他	番号	種別	法量			遺存	成形・調整・他
		口径	底径	器高					口径	底径	器高		
206	土環	10.4			寸		239	須蓋	11.5		5.1	寸	天一ケズリ
207	土環	12.4			寸	内面一ミガキ・黒色処理	240	須蓋				寸	天一ケズリ
208	土環	13.0			寸	内面一ミガキ・黒色処理	241	須蓋				寸	天一ケズリ
209	土環	15.4			寸	内面一ミガキ・黒色処理	242	須蓋	15.8		3.1	寸	天一ケズリ
210	土台環		5.8		寸		243	須蓋	15.9		3.1	寸	天一ケズリ
211	土台環		6.4		寸		244	須蓋	17.2			寸	天一ケズリ 自然軸
212	土甌		6.2		寸	外面ケズリ・ミガキ・内面 黒色処理	245	須蓋	15.9			寸	天一ケズリ
213	土甕		9.0		寸	ハケメ	246	須蓋	16.9			寸	
214	土脚台				寸	内面一ミガキ・黒色処理	247	須環	16.0			寸	底一ケズリ
215	土甕	16.8			寸	外面一ハケメ、内面一ナデ	248	須環	14.3	8.5	3.6	寸	底一ナデ
216	土甕	21.0			寸	外面一ケズリ、内面一ナデ	249	須環		6.4		寸	底一ヘラ切・ナデ
217	須環	10.4			寸		250	須環		9.6		寸	底一糸切
218	須環	11.7			寸		251	須台環	10.8	9.0	3.7	寸	
219	須蓋				寸	天一ケズリ	252	須台環		6.8		寸	底一ナデ
220	須蓋				寸	天一ケズリ	253	須台環		9.8		寸	底一ケズリ
221	須蓋	12.5			寸		254	須甕	19.1			寸	
222	須台環		7.0		寸		255	土甕	23.0			寸	外面一ケズリ 内面一ケキノ
223	須台環		6.9		寸	底一ヘラ切・ナデ	256	土甕	24.4			寸	外面一ケキノ 内面一ケキノ
224	須台環		13.3		寸	底一回転ケズリ	257	土甕	23.6			寸	内面一カキノ
225	須高環	15.6			寸		258	土甕	26.0			寸	内面一カキノ
226	須瓶		9.0		寸	自然軸	259	土甕	21.6			寸	
227	灰碗	13.5			寸	底一回転ケズリ	260	土環	8.2	3.3	1.9	寸	底一糸切
228	灰碗	14.4			寸		261	土環	9.1	4.8	2.5	寸	底一糸切
229	灰碗		7.2		寸	底一回転ケズリ	262	土環	10.4			寸	
230	灰碗		8.3		寸	底一回転ケズリ	263	土環	10.0	4.0	2.9	完	底一糸切
231	灰皿		7.4		寸	底一回転ケズリ	264	土環	12.2	6.0	2.5	寸	底一糸切
232	土甕	14.8			寸	ハケメ	265	土環	15.6	7.0	5.5	寸	外面一ケズリ 内面一ミガキ・黒色処理
233	土甕	15.6			寸	ハケメ	266	土台環				寸	内面一ミガキ・黒色処理
234	土甕	15.5			寸	外面一ハケメ、内面一ミガキ	267	土甕	17.5			寸	
235	土埴				寸		268	灰瓶	4.1			寸	
236	土脚台		9.0		寸		269	灰碗		6.5		寸	底一回転ケズリ
237	土把手						270	灰皿	13.2	7.6	2.7	寸	底一ナデ
238	土把手												

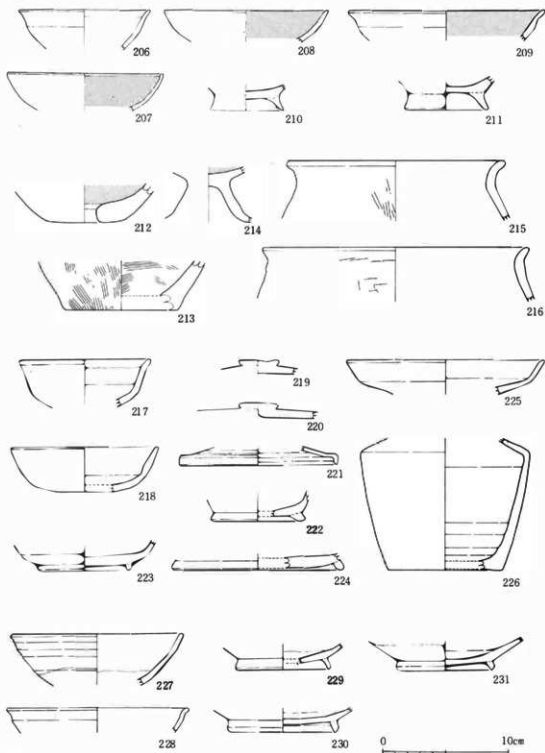


图27 1·2号溝址出土土器(1:3)

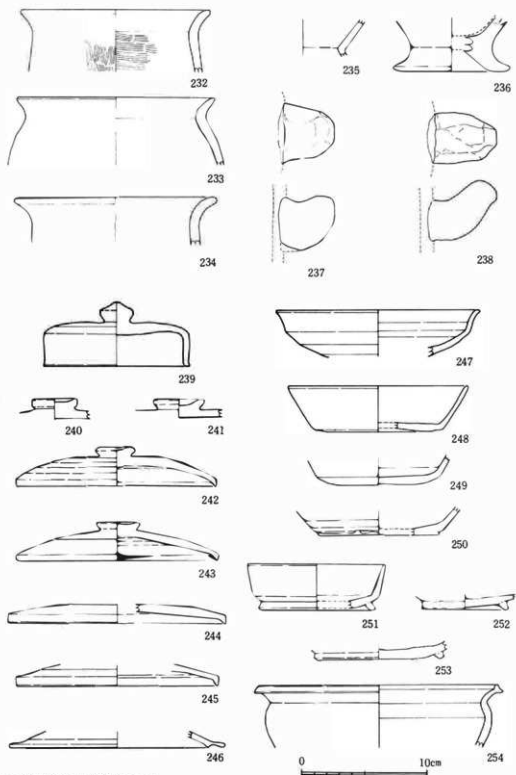


图28 検出面出土土器①(1:3)

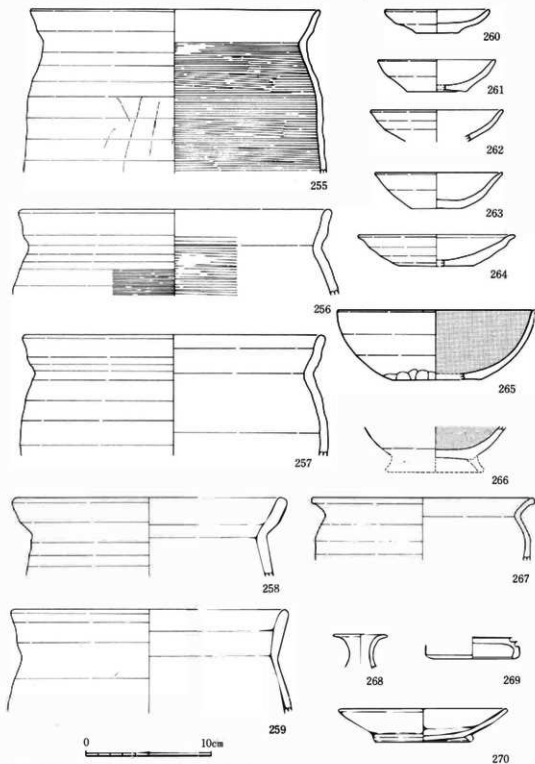


图29 検出面出土土器②(1:3)

Ⅳ 調査のまとめ —平安時代の土器様相について—

調査により抽出されたⅠ～Ⅲ期の遺構と遺物のうち、特に注目されるものはⅢ期の遺物であり、当該地の平安時代土器様相を考えるうえで良好な資料として提示することができる。

次に、本遺跡の土器群を軸とし、先年報告された「浅川扇状地遺跡群車礼バイパスB・C・D地点」資料を引用しながら、平安時代土器様相の段階的な把握を試みたい。

第1段階（「車礼バイパスB・D地点」古様相 図30）

土師器の製作技法に、回転台（ロクロ）が導入されたことを特徴的要素とし、前代の回転台を用いない土師器の伝統的様相が刷新される。坯は、ロクロ調整され、底部は回転範切・回転糸切の後静止ケズリ・回転ケズリにより丁寧に再調整される。内面が研磨され黒色処理が施される点は前代の伝統を踏襲する。裏は、北陸から北信に通常のロクロ裏の初源をなし、外面下半をヘラケズリ、内面をカキメとハケメにより再調整するもので、口縁部は須恵器的な形態を呈する。この須恵器的な形態の模倣は、次第に退化し、受口状の口縁部形態へと移行する。

須恵器坯は、底部切り放し技法が、回転糸切に統一され、無調整のままであることを原則とする。古相には回転範切によるものが遺存するようである。高台坯は次第に組成比率が減じ、消滅する傾向が現われる。

第2段階（「車礼バイパスB・D地点」中・新様相、「三輪遺跡」Ⅱ期 図31）

灰軸陶器の出現と搬入により、須恵器が粗雑化し消滅することを特徴的要素とする。

土師器坯は、底部回転糸切後の再調整が次第に失われ、底部の縁辺部のみを回転ケズリするものから無調整のものへと移行する。また内面黒色処理の伝統も、新相に至り消滅する傾向が現われる。土師器裏は、口縁部を受口状とした典型的なロクロ裏が成立し、次第に短嗣化するとともに、内面のハケメ・カキメ調整が粗略となる。

須恵器坯は、新相においては消滅するものと考えられ、灰白色を呈する低水度焼成の粗雑な製品が主流となっている。須恵器高台坯は、灰軸陶器の出現によりその存在価値が失われ、代わりに、灰軸陶器を模倣した土師器高台坯・高台皿が新器種として登場する。

灰軸陶器の出土例は少ないものの、古相に黒笹14号窯式製品(車礼バイパスD地点11号住居地)の伴出が確認される。

第3段階（「車礼バイパスC地点」「三輪遺跡」Ⅲ期 図32）

灰軸陶器の搬入増加に伴い、土師器が粗雑化し衰退することを特徴的要素とする。

土師器坯は、内面のヘラミガキ調整・黒色処理の伝統が完全に失われ、次第に小形化して「カワラケ」への移行を見せる。高台坯・皿も、新相には内面無調整が主流となり、底部無調整のまま高台を貼付するという最も簡略化された成形になる。同器種は、灰軸陶器碗・皿の模倣品として、器種組成のなかでは大きな位置を占めるようになる。土師器裏は前段階のロクロ裏の系譜上

に位置しながら、ヘラケズリ・カキメ・ハケメによる2次調整が消失し、組成における比率は、比較にならないほど減少している。また、羽釜が新たな品種として登場する。土師器煮沸用器種の衰退は、それに代わる金属製煮沸具の普及を暗示するものである。

灰軸陶器の伴出は、古相に虎溪山1号あるいは東山72号窯式、新相に丸石2号窯式の製品が確認される。

年代比定の根拠は、伴出している灰軸陶器の編年的研究成果による部分が大きい。灰軸陶器の編年をめぐっては、従来の年代観を修正する動向が認められる。斎藤孝正氏は、猿投窯の編年について、V期(K-14、K-90)を9世紀後葉から10世紀初頭に比定する編年観を提示し、吉田恵二氏は、K-14号窯式期が825年前後に置かれる可能性を指摘している。ここでは、灰軸陶器の出現期が、9世紀代にまで引き上げられるものと受とめておきたい。

この灰軸陶器の年代観をもとに、設定した各段階の暦年代を想定するならば、第1段階 9世紀前半、第2段階 9世紀後半～10世紀後半、第3段階 11世紀という年代観が導かれる。ただし、第1段階の古相は、「ロクロ土師器」の出現期と考えられ、坏底部切り放し技法に回転寛切が遺存しているため、奈良時代後半にさかのぼる可能性が強く、奈良時代の土器様相の把握も含めて、今後の検討を待ちたい。また、第2段階は、灰軸陶器の示す年代幅が大きく、土師器坏底部の回転ケズリ調整の消滅と、須恵器坏、高台坏の消滅過程がやや不連続であるため、将来的に再編成され、細分されて然るべきものといえる。

なお、長野市篠ノ井「石川条里の遺構」において、埋没水田層より出土した土師器・須恵器坏は、第2段階古相に比定されるものであり、同水田を被覆する氾濫土が日本紀略に登場する仁和4年(888)信濃国の大洪水に由来するとした場合、年代根拠の大きな柱をえることができる。同遺物と共伴して灰軸陶器破片が1点検出されているが、資料の増加が待たれるところである。

以上述べながら、当該地の平安時代の土器様相について段階的に把握してみた。その分析においては、各器種の型式学的検討が根幹となることは言うまでもないが、住居址内に時間幅を有しながら廃棄されたと考えるべき遺物、それも土師器坏や須恵器坏などの小形の器種について、50年単位での明確な形態差の抽出が可能となるかは疑問が残る。その細分において、製作技術の変移や器種組成における比率の関係が重要な視点となることが再確認できよう。特に、土師器製作に見られる技術刷新、灰軸陶器の出現と須恵器生産の衰退など、土器様相の変貌に関わる社会的要因について、今後大いに議論されることが期待される。

参考文献

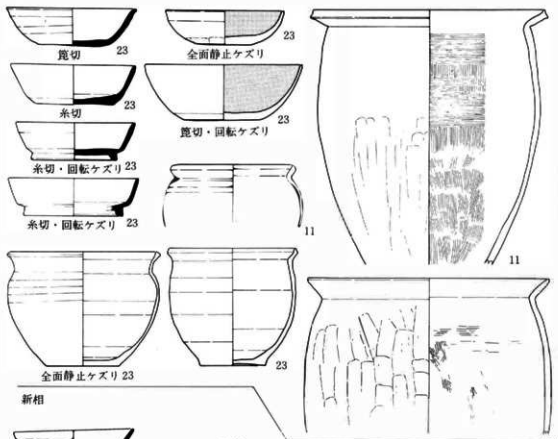
長野市教育委員会『浅川扇状地遺跡群-牛乳バイパスB・C・D地点-』1986

長野市教育委員会『石川条里の遺跡』1984

斎藤孝正「猿投窯における灰軸陶の展開」『考古学ジャーナル』211 1982

吉田恵二「緑軸陶と灰軸陶との相関関係とその年代について」『考古学ジャーナル』211 1982

古相



新相

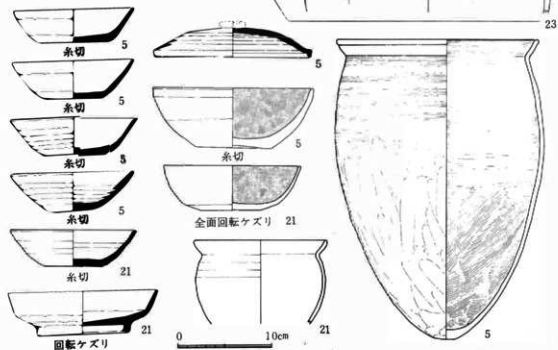


図30 第1段階の土器（牟礼バイパスB地点資料、数字は住居址番号）
 注）須恵器は断面を黒色にした

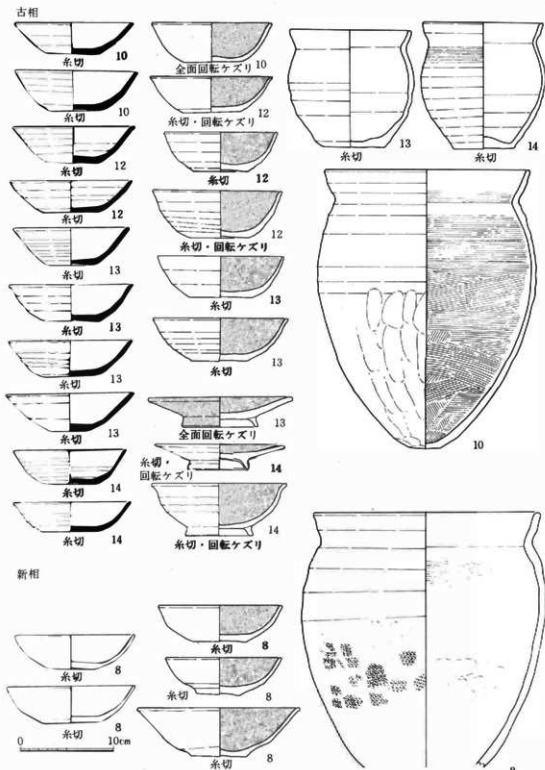
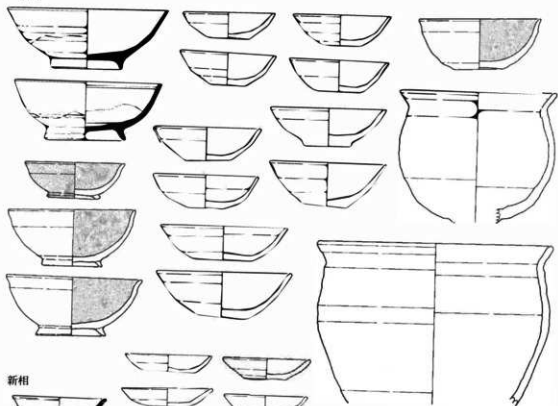


図31 第2段階の土器（牟礼バイパスD地点資料、数字は住居番号）
注）須恵器は断面を黒色にした。

古相



新相

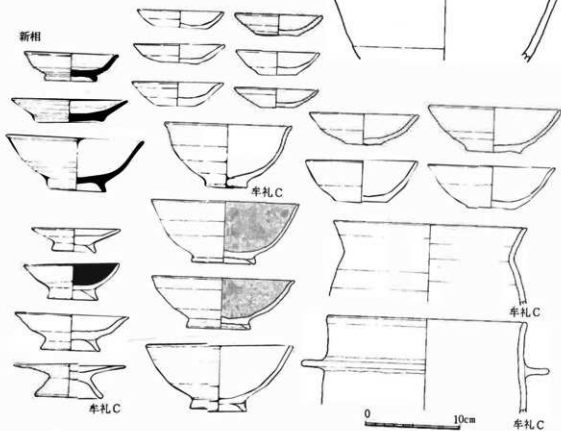


図32 第3段階の土器（古相—三輪遺跡1号住、新相—三輪遺跡3号住・車礼バイパスC地点資料）
注）灰軸陶器は断面を黒色にした



調査地全景



調査区西側

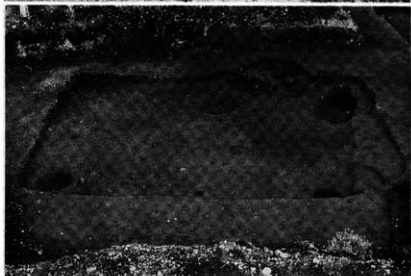


1号住居址
(遺物出土状況)

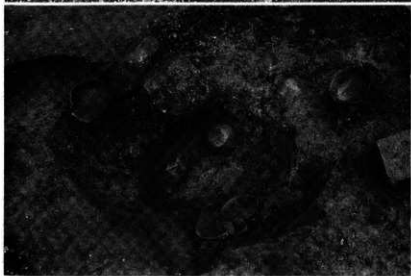
図版 2



1号住居址
(カマド)



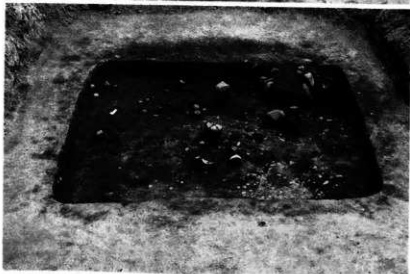
1号住居址
(完備)



1号住居址
(カマド内)



2号住居址
(南より)



2号住居址
(西より)



2号住居址
(北側)

図版 4



2号住居址
(カマド)



3号住居址



4号住居址

3号住居址
と
5号住居址



5号住居址

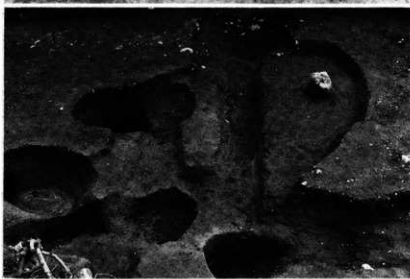


5号住居址
(カマド)





土坑



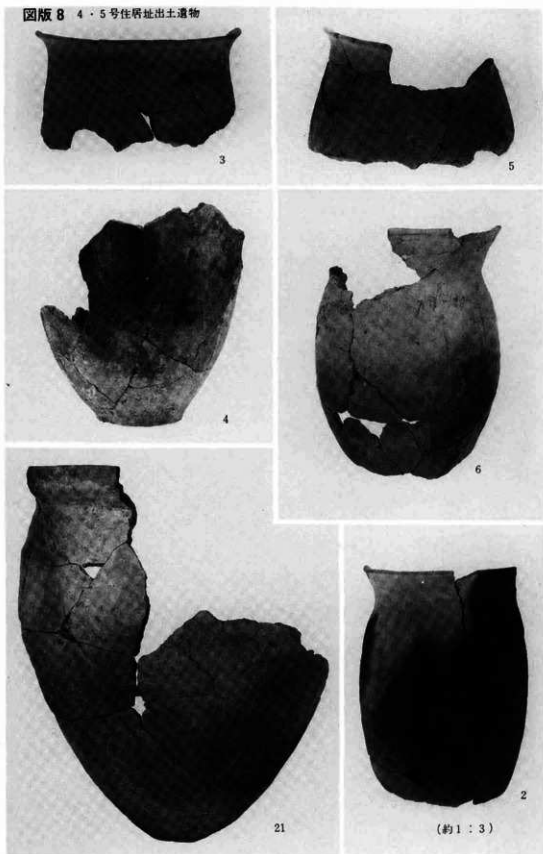
溝址
(西側)

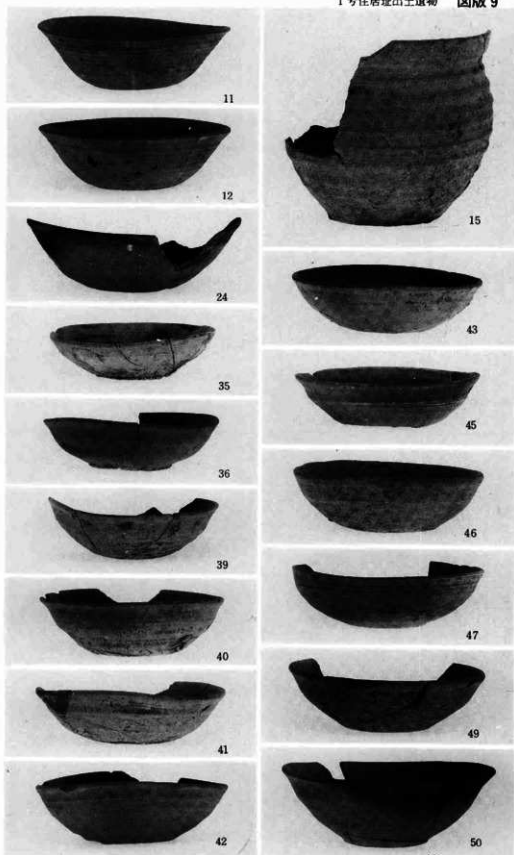


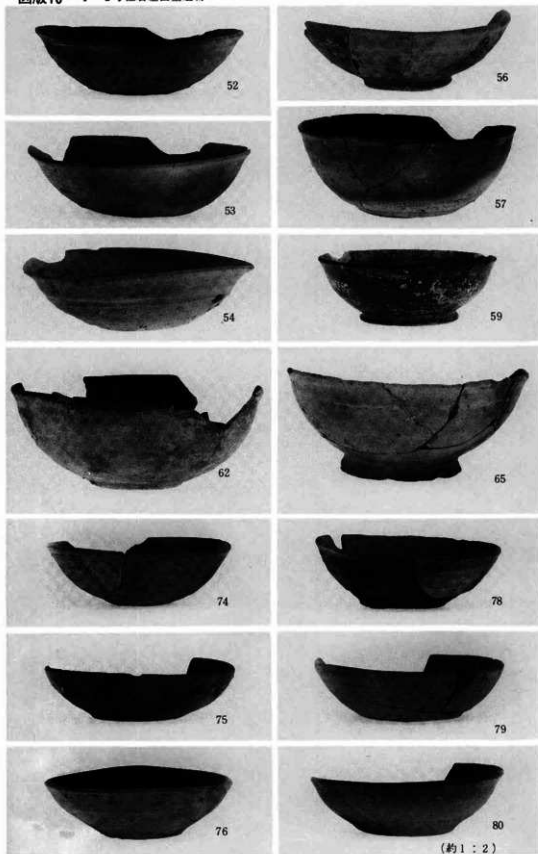
溝址
(東側)

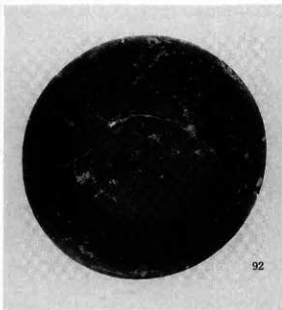


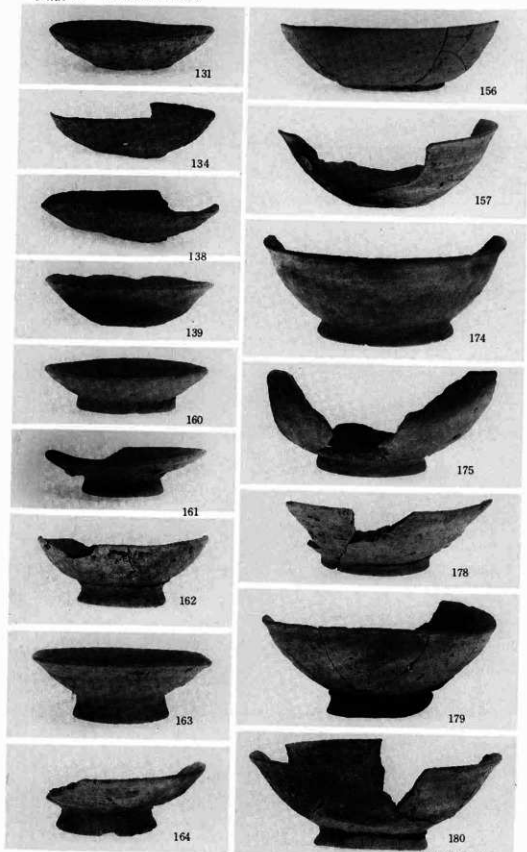
图版 8 4·5号住居址出土遺物

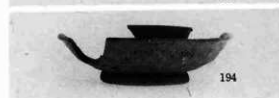
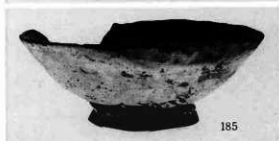












長野市の埋蔵文化財第20集

三輪遺跡(2) ——本郷住宅地地点——

発行日 昭和62年3月31日

発行 長野市教育委員会
長野市大字鶴賀緑町1613

印刷 西沢印刷株式会社
